

日本で初めての「情報セキュリティ学科」として、2016年4月に誕生した長崎県立大学情報システム学部情報セキュリティ学科。サイバー攻撃や情報漏えいが深刻な経営リスクとなる今、県内外の企業による視察なども絶えない。そんな同学科が力を注ぐのが3年次の「企業インターンシップ」だ。およそ3週間に及ぶ就業体験の狙いや効果とは――。情報セキュリティ学科の加藤雅彦教授に聞いた。

インターンシップは「お仕事見学」ではない

――情報セキュリティ人材に欠かせないスキルとは何でしょうか。

加藤 それは、ニーズを正確に汲み取る力だと思います。一般に、大学の重要な役割はシーズの創出ですが、こと情報セキュリティの分野においては、ニーズの重要性が高いと感じます。課題解決につながる技術や手法を生み出すことこそが求められています。

その意味で、現場で何が必要とされているかを身をもって知る機会が極めて重要。インターンシップは、学生たちに現場を目の当たりにしてもらう場にはなりません。期間を約3週間にしているのも、単なる「お仕事見学」で終わらないようにするためです。

「答え」のない現実の社会で 情報セキュリティを守る力を



加藤雅彦 (かとう・まさひこ)
長崎県立大学 情報システム学部
情報セキュリティ学科 教授

2016年4月より現職。前職インターネットイニシアティブの頃より現在まで、経済産業省やIT業界団体などのセキュリティに関する委員も数多く務める。ネットワークセキュリティが専門。博士(工学)。

実地でなければなかなか経験できません。
バラバラなピースを
統合できる力を養成する

――企業インターンシップに参加した学生にはどんな変化がありましたか。

加藤 多くの学生は、端的に学ぶ姿勢に真剣味が増しています。それは、大学で学んでいることの意味を企業活動の中で理解できたことに加え、社会人のある種のプライドに触れたことが大きいと思っています。情報セキュリティに携わる人間は、「できる、できない」ではなく、「どうすればできるか」を考え抜かなければならない。技術力はもちろんですが、そうした精神力の強さを直に目にしたこと、これから社会に出る学生たちには大いに刺激になったのだと思います。

――今後、社会にどんな人材を輩出していきたいか。抱負をお願いします。

――まさに、実践的な教育の場という位置づけですね。

加藤 そのとおりです。もちろん私たちの学科では学内の授業でも実用性を重視しています。例えば「インシデント対応演習」では実社会に即した企業概要やサイバー攻撃を詳細に設定し、学生たちには適切だと思われる対応をゼロから、自由な発想で考えてもらっています。しか

し授業である以上、そこにはどうしても目的や学ぶべきことがあります。それがなければ、授業として成立しません。

ところが、現実の社会でのセキュリティ対策やインシデント対応に「答え」は用意されていません。限られた条件、さまざまな制約の中で、いかに被害を最小化する方策を探っていくか。これが何より大事なのです。そうした状況はやはり

加藤 数カ月前の情報はもう古いというのが情報セキュリティの世界。既知の知識をただ覚えるだけでは、柔軟な対処は困難です。サイバー攻撃が高度化し、対処する技術も細分化する中では、いわばバラバラに散らばったパズルのピースを俯瞰して、一つの絵にしていける力が必要で。断片的な情報を統合し、判断、行動する力の養成こそ、日本初の情報セキュリティ学科である私たちの使命だと思っています。

情報系企業だけでなく、メーカーやサービス業などあらゆる業界で情報セキュリティ人材が不可欠な現在、身に付けた知識を有効な道具として使いこなしながら、しっかりとニーズと向き合える人材を一人でも多く輩出していきたいと考えています。



情報セキュリティ学科の「セキュリティ演習室」。先端の設備、機器が導入され、学内で実社会におけるサイバー攻撃の観測などが可能だ。

“探究心”や“好奇心”の大切さを リアルな現場で感じてほしい

長崎県立大学からインターンシップを受け入れたディアイティは、情報セキュリティの専門企業。製品提供からシステム構築、インシデント対応に及ぶトータルソリューションで高い支持を得ている。代表を務める戸田勝さんはインターンシップの内容や意義について次のように話す。

期間中、学生はフォレンジックと呼ばれるデータ解析や外国製セキュリティ製品の検証に従事しました。試して体験してもらうというよりは、普段の業務そのものです。

結論から言えば、受け入れた学生はいずれも非常に優秀でした。例えばウイルス解析では、こちらが指示しなくても、ソースコードの復元など一歩踏み込んだ作業に取り組んでおり、大学における授業の質の高さがうかが

われました。

では、そうした確かな知識や技術を学んでいる学生にインターンシップで何を感じてもらいたかったか。それは、“探究心”や“好奇心”の大切さです。サイバー空間における脅威は日々進化しており、常に未知の出来事に対応していかなければならない。そうした現実を実感してほしいと考え、リアルな現場を見てもらいました。

コミュニケーション能力も 重要なスキル

そしてもう一つ、企業で働くことの意義はコミュニケーションの重要性を確認できることです。セキュリティの技術者というと、黙々とPCと向き合う姿がイメージされますが、どんな業務も一人では完結しません。いまや



戸田 勝 (とだ・まさる)
株式会社ディアイティ 代表取締役社長

日本エヌシー・アール、フューチャーシステムコンサルティングを経て、2015年にフューチャーインスペースの代表取締役社長に就任。18年より現職。

サイバー攻撃自体が組織的に行われており、対応する側にも各分野の専門スタッフの連携、チームワークが求められます。

また、セキュリティの課題を抱えるお客様は、情報技術に詳しい方ばかりではありません。そのような中で、ニーズを正確にとらえ、解決策を提示するにはやはりコミュニケーション能力が大事になります。そうした現実を知るのにインターンシップは絶好の機会だったと思います。

今の時代、情報ネットワークに障害が発生すれば、さまざまな社会活動がストップしてしまう。情報セキュリティに携わる人間は社会インフラを支える存在です。即戦力の養成を掲げている長崎県立大学から、責任感、そして社会貢献の視点をも備えた真の情報セキュリティ人材が生み出されることを期待しています。



インターンシップの場となったディアイティの社内。複雑化、巧妙化するサイバー攻撃と最前線と向き合い、顧客の要請に応えている。